平成 27 年度　記者懇談会（第 5 回）の記録

日　時　平成 27 年 8 月 28 日（金）午後 3 時 30 分
場　所　水道庁舎 4 階 会議室
記者数　8 人
同席者　阿部副市長、天野副市長、総務部長、経済部長
次　第　1　北海道そらちグルメフォンドについて
2　ふるさと百餅まつり、いわみざわ情熱フェスティバルについて
3　その他について

1　北海道そらちグルメフォンドについて

説明内容

（市長）

最初に、北海道そらちグルメフォンドについてご説明させていただきます。

いよいよ開催までに２日と迫ってまいりましたが、このイベントは、いわみざわ公園野外音楽堂キタオンを発着といたしまして、途中のエイドステーション及びゴール地点において、各自治体の「食」を提供するグルメと、サイクリングを融合させたイベントでございまして、今年は南空知を舞台として開催することになります。

昨年はじめて美唄市をスタートとゴールとして開催して、今年は２回目となるわけですが、主催自体は、北海道そらちグルメフォンド実行委員会でありますが、岩見沢市のほか、美唄市、由仁町、長沼町、栗山町、月形町、岩見沢市観光協会、岩見沢サイクリング協会などで実行委員会を構成をいたしまして、大会長は私が務めさせていただくこととなっております。

また、大会の運営には、陸上自衛隊岩見沢駐屯地第１２施設群の方々にもご協力をいただきます。

開催日は、明後日の８月３０日（日）で、１００㎞コースのスタートが午前８時、５０㎞コースのスタートが午前１０時３０分、各コースのスタート時間の３０分前にはそれぞれ開会式を行う予定となっております。

コースにつきましては、１００㎞コースが野外音楽堂キタオンをスタートいたしまして、長沼町～由仁町～栗山町を経由してキタオンにゴールをいたします。５０㎞につきましては同じくキタオンをスタートいたしまして、長沼町～栗山町を経由してキタオンにゴールすることとなります。

当日の参加者でございますが、１００㎞コースが４１１名、内訳は一般の方が４０３名、小中学生が８名、５０㎞につきましては１２４名の参加、一般の方が９８名、小中学生が２６名となっているところでございます。

また、各エイドステーションやゴール後のおもてなしステーションでは、資料にありますような飲食メニューを提供させていただき、南空知の自然景観と食を満喫できるサイクリングイベントとして実施をさせていただきます。

なお、ゲストライダーといたしましては、元モーニング娘の吉澤ひとみさん、もうひと方いらっしゃいまして、元マウンテンバイククロスカントリーの全日本チャンピ

オンでアテネオリンピック日本代表でもありました竹谷賢二さんが参加することになっております。以上でございます。

質疑応答

（プレス空知）

市長は参加されるのですか。

（市長）

はい、５０kmに出ます。完走を目指します。

（プレス空知）

練習はされましたか。

（市長）

していません。回収されないようになんとか完走したいと思います。

（ブレス空知）

去年は５０kmに出られたのでしたか。

（市長）

はい、１００kmに出まして、随分早くゴール地点に戻りましたね。

（読売新聞）

はじめて参加される自治体はありますか。

（市長）

ないと思います。去年は美唄発着、大会コースの自治体を基本にやっていたので、滝川市さんとかが入っていましたが、今年は南空知が中心なので、南空知のコースを中心とした自治体に、グルメで参加いただいております。

２　ふるさと百餅まつり、いわみざわ情熱フェスティバルについて

説明内容

（市長）

それでは、ふるさと百餅まつり、いわみざわ情熱フェスティバルについてご説明させていただきます。

今年で第３３回を迎えることになりました、ふるさと百餅祭りでございますが、９月１９日（土）から２１日（月・祝）の３日間、４条西２丁目交差点のほか栄通りを会場に開催されることになります。

期間中、７回開催の大臼餅つきのほか、長寿餅まき、百餅市のほか、協賛事業といたしましてはチビッコ百臼餅つきや百餅市民神輿渡御、大型人形劇などが行われることとまっております。

次にいわみざわ情熱フェスティバルでございますが、９月２０日（日）から２１日（月・祝）の２日間、駅東市民広場公園を会場に実施をいたします。

会場では、岩見沢産の食材を使用いたしました飲食メニューの提供や販売、そして市内で製造された製品の展示、生活提案型の製品の販売、ＪＡいわみざわなどによる

地元産の新鮮な農産物の直売のほか、各種ステージイベントなども予定しているところでございます。以上です。

質疑応答

（プレス空知）

百餅まつりの方なのですが、昨年は今月ダイエーさんを会場にやっていた部分もありましたが、ダイエーが閉店ということで、別のかたちで何か新しい催しなどの予定はありますか。

（市長）

ダイエーさんの会場を使っての催しはないです。それぞれステージ発表等々で趣向を凝らして観光協会でも取り組んでいくということでございます。それに代わり得るということでは、そのもの自体を充実して取り組んでいくということでございます。

（北海道新聞）

百餅まつりと情熱フェスティバルを同時に行うのはどうしてですか。

（市長）

百餅まつりは開基１００年を記念して、若い方々のアイディアを基に催したイベントなのですけれども、健康長寿と豊作なのですよね。それとかつてはその時期に物産展を開催していたのですね。そこを地元産の農産物の販売を中心とした各岩見沢の特産物を揃えた情熱フェスティバルとして期間を重複して開催することになりました。

百餅まつりは岩見沢神社の秋祭りに合わせて催していたのですけれども、カレンダーの関係もあって、百餅まつりはちょうどその休日の期間、岩見沢神社まつりは、９月１４、１５、１６日という日程でそちらの方は固定されてしまっているので、連休に合わせて中心部でイベントをやっていました。あと南空知の物産展も東山公園で開催していたのですけれども、街の中に移動したことによって、新たな物産展というかたちで、情熱フェスティバルとして農協さんともタイアップしながらやっているということでございます。豊穣の秋を市民の皆さまはじめ多くの皆さまに味わっていただく、楽しんでいただくということになるかと思います。

（北海道新聞）

相乗効果なのか分散されるのかどうなのでしょうか。

（市長）

百餅まつりの大臼は４条西２丁目の交差点内に設置をいたします。栄通りが全て連絡通りになりますので、そこに全て露天が出て、参加される人たちが行き来する通路になります。そこで露天などを楽しみながらその先には、駅東市民広場があってイベントを楽しめるというかたちになります。赤レンガホールのディスプレイの中には餅つきの様子なども映し出されるということで、離れた会場にいても別会場の様子がわかるというシステムになっています。

3　その他について（記者からの質問）

質疑応答

（ＨＢＣ）

教育大学の関係で気になる話題が出ておりまして、６月に文科省からの通達で国立大学の文系、特に教育学部については廃止や転換するようにと通達が出ており、今月他者の報道によると下村文科大臣の話ですが、教育学部の中でも特に教員を養成しない課程については廃止をすべきと出ており、まさに岩見沢の教育大学に当てはまるのかなと思ったのですが、この件に関して何か市に打診や今後に向けての協議の話は来ていないでしょうか。

（市長）

いいえ来ておりません。国立大学は全国に確か８６校あるはずですが、そこの学長を東京に集めて、下村文部科学大臣から国立大学の文系の見直しのお話があったということについては、その直後に岩見沢の教育大学の本間学長とお会いする機会があったのでお聞きしました。内容としては、研究分野で世界に出ていく大学と一芸に秀でた大学、あとは地域と連携する大学としていくとの構想の話をお聞きしました。世界と戦う大学は国内のトップテンぐらいでしょうか、一芸に秀でた大学は１０校程度、残りは地域との連携を深めながら授業展開をしていく大学ということになるのではないかとのお話をお聞きしました。教員養成系では教育学部を見直すところの基本的な認識は、子どもの数が減っていますけれども、その兼ね合いで、教員養成自体を大きく見直すという認識でいます。岩見沢校については、教員養成を持たない教育学部の中に存在していましたけれども、昨年は学科ということになりました。学部にはなっておりませんけれども、学科としてほぼ学部に近いような機能を持ち合わせている大学ですので、詳細は全然お聞きはしていませんけれども、むしろ岩見沢市として、スポーツと芸術と文化の分野での大学との連携をより深めていくということで色々と検討を進めているところです。

（ＨＢＣ）

岩見沢市だと最近では、あそびプロジェクトですとか体育館を含めハード面やソフト面で色々な連携を深めていると思うのですが、岩見沢市としての教育大学の位置付けはどのようなものと考えていますか。

（市長）

これまでもそうですし、これからもそうだと思いますけれども、空知管内で唯一の国立大学で、スポーツと芸術・文化に特化をした大学ということで、全国でもかなりユニークな特色を持っている大学であることは間違いありません。また、全国から学生さんも集まってきていますし、その分野というのはこれから将来性のある分野であると私どもとしては認識をしています。スポーツあるいは芸術の分野でより具体的な連携が図れないかということもありますし、大学の基盤整備の中で、今までも経済的な支援もさせていただきましたけれども、例えば今回、２０２０年のオリパラですけれども、岩見沢市のパラリンピックの誘致については教育大学と連携をして誘致に努めています。なぜ障がい者のスポーツかといえば、基本的には岩見沢教育大学の中でアダプテッドスポーツの研究をなさっている先生もいらっしゃって、アダプテッドと

は、適合するということで、単純に障がい者スポーツということではなくて、障がいのない方でも一定の要件で適合させれば一緒にスポーツができるという考え方なのですけれども、その考え方と岩見沢市がこれから進めることとしているまちづくりがお互いに相乗効果が図れるという認識でいます。

（プレス空知）

教育大学で今ネーミングライツを募集していますが、岩見沢市が大学との連携の部分で命名権を取得という想定はしていますか。

（市長）

岩見沢市がネーミングライツを購入してということは想定していないです。

（プレス空知）

先日、ポカテロに参加されてのご感想をいただきたい。

（市長）

アイダホ州のポカテロ市と最初に姉妹都市の提携を結んだ年に岩見沢市から派遣されたメンバーの一人だったのですね。当時は副団長で団長は石田教育長さんで、私の他数名で１０名はいなかったかと思います。翌年は子ども達を本格的に連れて行きました。それぞれ自治体行政の組織が違うので単純な比較はできないのですが、岩見沢市は行政が中心となってやっていますが、ポカテロ市では姉妹都市委員会という民間組織がありまして、その方々が中心となって受け入れ、あるいは子ども達の派遣をしていただいています。考えてみれば、かく言う姉妹都市というのが全国で一時期的に増えましたけれども、これまでの３０年間、地道に青少年の親善交流を中心としてお互いに交流を続けているというのは、道内でもほとんどないのではないかと思います。それは岩見沢市の市民の方も一生懸命やっていただいていますけれども、ポカテロ市の市民の方、姉妹都市委員会の方がより善意で努力していただいているのだなと実感できました。そういったお話を聞く機会もできましたし、ポカテロ市では今回岩見沢市の方が訪問している間は、姉妹都市ウィークと言ったかな、そういうことで市をあげて歓迎していますよというような取組みをしていただきましたし、非常にのどかな西部のまちですけれども、あらためて単にノスタルジックに浸るのではなくて、姉妹都市の持つ意味を自分なりに考えさせられた、再認識したというのが正直な感想ですね。

（注）記録の内容については、重複した言葉遣いや、明らかな言い直しがあったものなどを整理した上で作成しています。（作成：岩見沢市秘書課広報係）